〔海道記〕八日（貞應二年四月）○中略三河國にいたりぬ、宮橋といふ所あり、數雙のわたし、板は朽て跡なし、八本の柱は殘て溝にあり、心のうちにむかしをたづねて、ことのはしに今をゑるす、

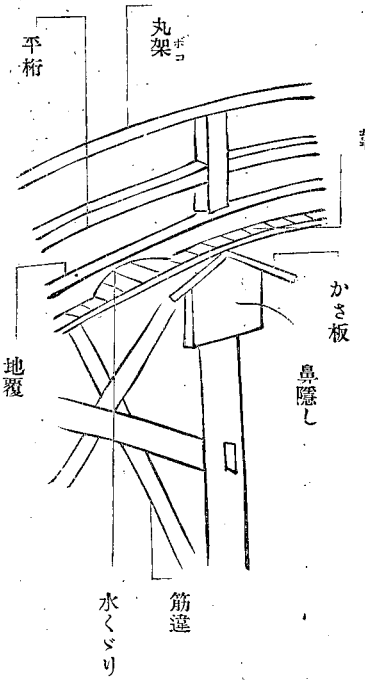
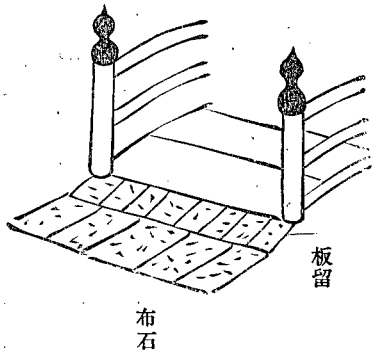
宮橋の殘るはしらにことゝはん朽て幾世かたえわたりぬる

〔廻國雜記〕越前國○中略ゑらきどの橋といへる所にて、さと人にたづね侍れども、こたふるものも侍らずして、

さとの名もいざゑらきどの橋ばしらたちよりとへばなみぞこたふる

〔新撰字鏡連字〕憧柄（橋梁之左右之柱、乎止古柱、）

〔安齋隨筆前編十一〕橋ノ男橋　平家物語長門本（宇治合戰ノ條）云、人々落けれども、省ハ宇治橋のおとこ柱たてに取て、命もおしまずたゝかひけり云々、○中略今も男柱といふなり、

〔大神宮諸雜事記二〕康平二年七月廿日夜、外宮乃心柱乃覆榊爲放牛仁、又被喰損已了、仍造宮使元範朝臣上奏之處、早可立替之由宣下畢、○中略正殿乃金物、幷四面高欄、御階男柱等、今度初所被奉莊也、

〔一話一言三〕橋に男柱、袖柱、中男といふ柱あり、